

都道府県サッカー協会/地域サッカー協会 専務理事/理事長 各位
各種サッカー連盟 御中

2006 年 4 月 11 日
財団法人日本サッカー協会
ジェネラルセクレタリー 平田竹男

サッカー活動中の落雷事故の防止対策についての指針

1. [基本的指針]

全てのサッカー関係者は、屋外でのサッカー活動中（試合だけでなくトレーニングも含む）に落雷の予兆があった場合は、速やかに活動を中止し、危険性がなくなると判断されるまで安全な場所に避難するなど、選手の安全確保を最優先事項として常に留意する。特にユース年代～キッズ年代の活動に際しては、自らの判断により活動を中止することが難しい年代であることを配慮しなければならない。

※ 全てのサッカー関係者とは主として指導者（部活動の顧問含む）、審判員、運営関係者などであるが、下記にある通り放送局やスポンサー他、選手も含めて広義に解釈するものである。

2. 基本的指針の実行のために、下記の事項について事前に良く調べ、また決定を行ったうえで活動を行うものとする。

① 当日の天気予報（特に大雨や雷雲などについて）

② 避難場所の確認

③ 活動中止の決定権限を持つ者の特定、中止決定の際の連絡フローの決定

※ サッカー競技規則上では「試合の中止は審判員の判断によること」となっているが、審判員が雷鳴に気づかない、審判員と他関係者との関係で必ずしも中止権限を審判員が持てないケース（例えばユース審判員；これに限らない）などもあり、このような場合は中止を決定する/または審判員に中止勧告を行う人間をあらかじめ明らかにしておくこと。

※ トレーニングやトレセン活動なども活動中止決定者を事前に決めてから活動をはじめるものとする。

※ 中止決定者が近くにいない状況で現象が発生した時は、その場にいる関係者が速やかに中止を決定できることにしておく事。

3. 大会当日のプログラムを決める際はあらかじめ余裕を持ったスケジュールを組み、少しでも危険性のある場合は躊躇なく活動を中止すること。

大会スケジュールが詰まっていたり、テレビ放送のある試合などでも、本指針は優先される。従って事前に関係者（放送局、スポンサー含む）の間において、選手・観客・運営関係者等の安全確保が優先され、中止決定者の判断は何よりも優先されることを確認しておくこと。

4. 避雷針の有無（避雷針があるからと言って安全が保障される事はないが、リスクは減る）や避難場所からの距離、活動場所の形状（例：スタジアム、河川敷G、等）によって活動中止の判断時期は異なるが、特に周囲に何もない状況下においては少しでも落雷の予兆があった場合は速やかに活動中止の判断を行うこと。

以上

添付：落雷の予兆に関する参考資料

〈落雷の予兆〉に関する参考資料

文献『雷から身を守るには－安全対策Q & A－改訂版』(日本大気電気学会編、平成13年発行)には、落雷被害を避けるための予知方法について次のように記述されている。以下抜粋して掲載する。

「どのような方法でも発生・接近の正確な予測は困難ですから、早めに安全な場所(建物、自動車、バス、電車などの内部。)へ避難することです。

モクモクと発達した一群の入道雲は落雷の危険信号です。厚い黒雲が頭上に広がったら、雷雲がさらに近づいたと考えて下さい。雷雲が近づくときは、多くの場合は突風が吹くとともに気温が下がり、やがて激しい雨になります。しかし、突風や降雨より落雷が先に起こることがありますので、早めの避難が大切です。」

「雷鳴はかすかでも危険信号です。雷鳴が聞こえるときは、その後の雷が自分に落ちてくる危険がありますから、すぐに安全な場所に避難して下さい。雷鳴が聞こえなくて雨も降っていないときに、突然落雷が発生する場合もありますので、雷鳴だけで雷の発生や接近を判断するのは危険です。

もっと遠いところの雷の発生は、ラジオで中波や短波のAM放送を受信していると、ガリッガリッという雑音が入ることにより、検知できます。雑音の間隔が短くなり、激しく連続的になるときは、雷がさらに接近してくるときです。このときはラジオの雑音だけでなく、雷鳴にも注意して下さい。雷鳴が聞こえてくれば、雷雲はすでに危険な範囲に入っています。」

「雷雲が遠ざかって雷鳴が聞こえなくなても、20分くらいはまだその雷雲から落雷の危険がありますから、安全な場所で待機することが必要です。また、一つの雷雲が去っても、次の雷雲が近づいてくる場合がありますので、新しい雷雲の接近に常に注意することが必要です。」

「自動車、バス、列車、鉄筋コンクリート建築の内部は安全です。」「本格的な木造建築の内部も普通の落雷に対しては安全です。しかし、テントやトタン屋根の仮小屋の中は、屋外と同様に雷の被害を受ける危険があります。」

「絶えず雷鳴に注意し、空模様を見守ります。雷鳴がきこえたり雷雲が近づく様子があるときは、直ちに近くの建物、自動車、バスの中に入り、安全な空間に避難します。雷鳴は、遠くかすかに聞こえる場合でも、自分に落雷する危険信号と考えて、直ちに避難して下さい。雷活動が止んで20分以上経過してから、屋外に出ます。」

屋根のない観客席も危険ですから、安全な場所に避難します。」

以上

サッカー活動中における落雷事故防止対策について

JFA



はじめに

近年の温暖化や環境変化の影響に伴い、雷の予測が難しい事例が増えており屋外でのサッカー活動における事故防止対策がより求められている。特にグラスルーツでの活動は、周辺施設など必ずしも緊急時に安全性が確保されている環境下ではないケースも多く、より一層の事前の準備も含めた安全確保と周知徹底に努めるようお願い申し上げます。

原則

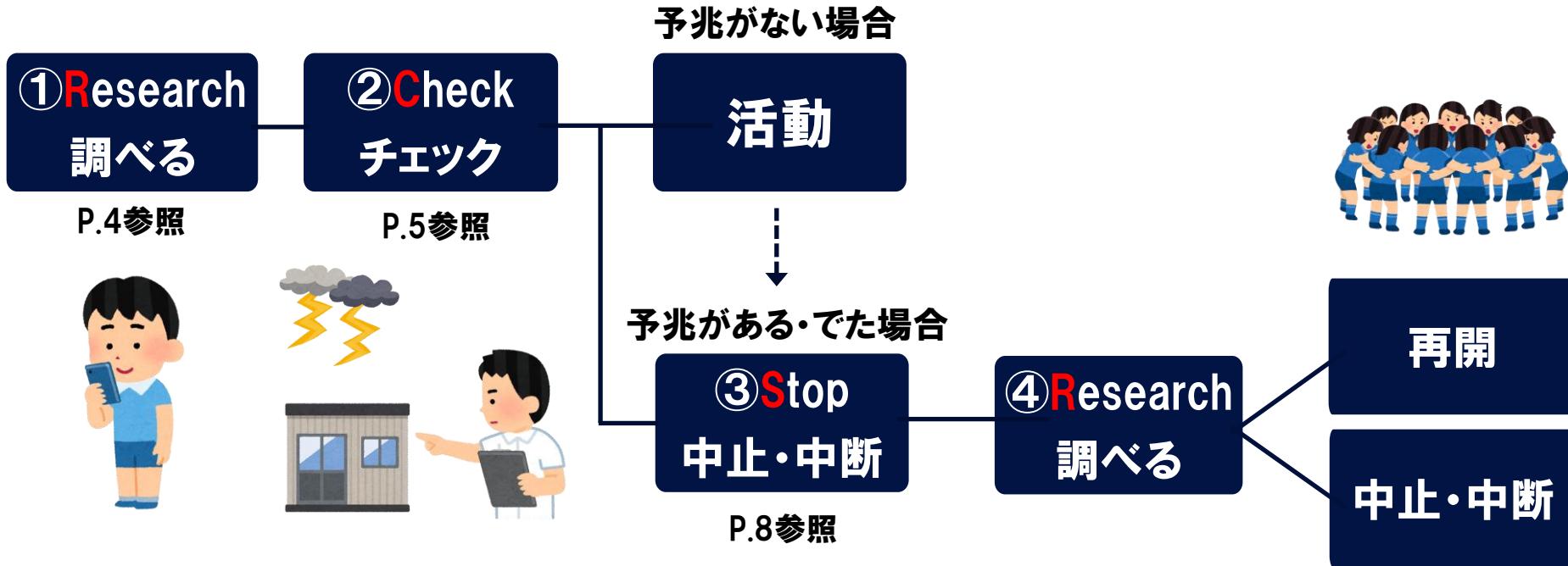
- ①周辺で雷注意報・兆候がある場合、専門的なウェブサイトで常時天候情報を確認すること。
- ②危険・兆候が確認されたら公式戦・練習にかかわらず躊躇なく中止すること。

※雷警報は存在しないため、雷注意報の段階で細心の注意を払うこと。

フロー

ポイント

活動前・中のRCSRの徹底（Research → Check → Stop → Research）

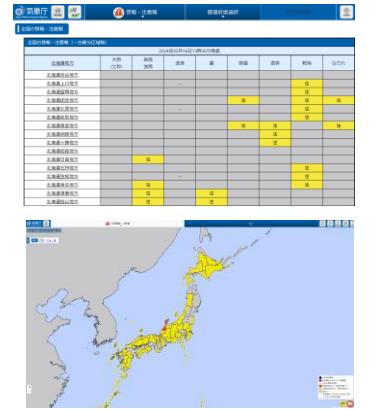


① Research (気象情報の確認方法)

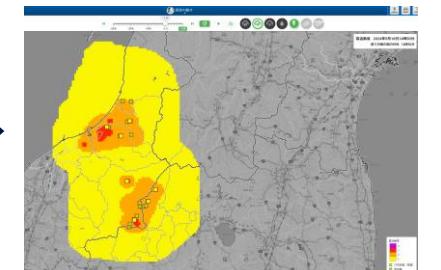
気象庁提供情報の「雷注意報」の発表状況や、「雷ナウキャスト」で実際にどこで落雷・雷発生が高まる予測になっているのか情報収集を行う。
また事前に危険が予想される場合、日程・時間を調整する等の対策を講じる。

気象庁 提供情報

全国の気象注意報



雷ナウキャスト



② Check (チェックリストによる確認)

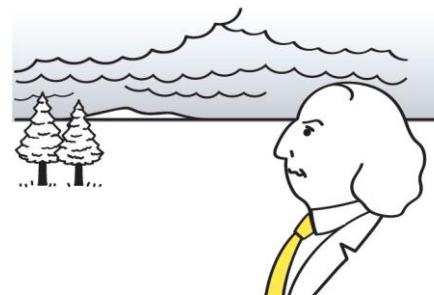
チェックリスト	チェック欄
1 活動前・活動中における周辺の気象情報確認者の明確化	
2 活動の実施可否判断者の明確化	
3 周辺の落雷・雷注意報の確認(目視・音での確認も含む)	
4 避難場所の確認 (P.7 参照)	
5 AEDの有無	

気象情報の確認方法(目視・音での確認)

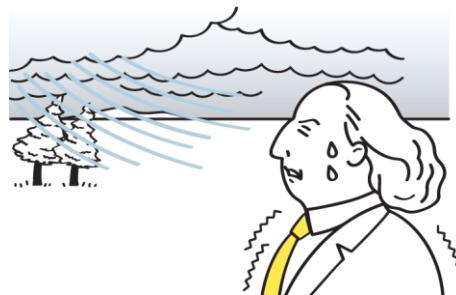
①積乱雲がみるみる大きくなる



②黒い雲が近づき、暗くなる

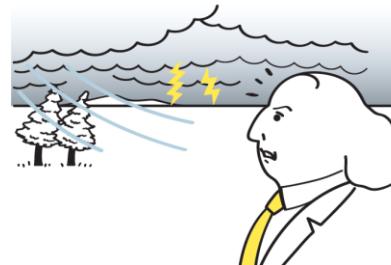


③急に冷たい風が吹く



④雷光が見える、雷鳴が聞こえる

※雷鳴が聞こえた時には既に約10km以内で雷が発生



避難場所の確認

安全

- ・自動車等の乗り物の内部
- ・鉄筋コンクリート製の建物の内部
- ・避雷設備の施された建物の内部
- ・本格的な木造建築物の内部

危険

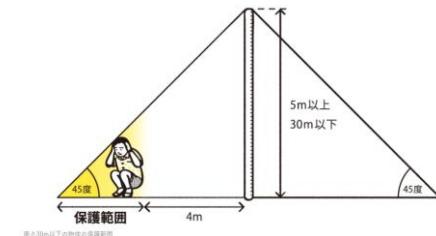
- ・避雷設備のないあずま屋
(屋根と柱だけで壁のない建物)
- ・テント、屋根付きベンチ、掘っ建て小屋
- ・木のそば

【近くに安全な建物や乗り物がない場合】

電線の下、鉄塔や電柱など高さ5m以上の高い物体の付近。ただし4m以上離れ、姿勢を低くする。

※物体との距離が近い場合、側撃や落下物の危険がある

※木は電気を通しにくいため側撃が起こりやすく距離を取っても危険



③ Stop→④ Research中断からの再開基準

雷活動(雷鳴、雷光)が止んでから**30分**以上経過し、気象情報の確認結果からも当面は新たな雷雲の接近はないと判断できる場合、活動を再開する。



補足：雷に打たれた時の対応

雷に打たれた場合、「心肺停止」「やけど」「意識障害」「鼓膜穿孔(鼓膜がやぶれること)」の症状の可能性がある。

上記可能性がある場合、救急車を呼び救急車が到着するまでの間、心肺蘇生法や火傷の手当てなど応急処置を施す。

■心肺停止の場合

- ・AED、心肺蘇生の実施
- 即座に応急処置を施せば、助かる可能性がUP



■やけどの場合

- ・急いで冷たい水、水道水を注いで痛みが取れるまで冷やす。
- ・衣類を脱がさないで、そのまま衣類の上から冷水をかける。



監修：株式会社フランクリン・ジャパン

